

## 目次

巻頭言	002
<b>第1章 気仙沼市の地域に根ざした「持続発展教育（ESD）」の推進</b>	
I 「持続発展教育（ESD）」の必要性と教育的意義	004
II 気仙沼市小中学校の「持続発展教育（ESD）」の推進状況	007
III 気仙沼市立学校教頭会としての「持続発展教育（ESD）」推進の取組	010
IV 「持続発展教育（ESD）」を通じた児童生徒の変容	014
V 更なる推進に向けた学校教育における「持続発展教育（ESD）」の課題	015
<b>第2章 気仙沼市内各校のユネスコスクールの取組事例</b>	
I ユネスコスクール加盟校及び取組の一覧	016
II 各ユネスコスクールの実践概要	
①小学校（20校）	018
②中学校（11校）	060
③高等学校（2校）	084
<b>第3章 気仙沼市におけるESD/ユネスコスクール普及推進のための取組</b>	
I ユネスコスクール研修会Ⅰ	088
II ユネスコスクール研修会Ⅱ	089
III 気仙沼ESD/RCE円卓会議2010	090
IV サテライトESDセミナー2010	091
<b>第4章 気仙沼ESD/ユネスコスクールと宮城教育大学・東北大学との協働</b>	
I 気仙沼ESD/ユネスコスクール活動のこれまでと今後の展望	092
II 気仙沼の持続可能な地域づくりとユネスコスクール	096
III 気仙沼での野外教育を通じたESDの実践	097
IV 気仙沼の自然と環境教育	098
V 学校のESDは地域の自然環境の保全にどのような役割を果たすか	099
VI 唐桑中学校と東北大学大学院環境科学研究科の連携	101
<b>第5章 データで見る気仙沼ESD/ユネスコスクール</b>	
I ESDの取組状況	102
II 教職員のESDに対する意識	106
III ESDの推進体制	108
おわりに	110
参考文献・執筆者一覧・研究同人	111
気仙沼ESDプロジェクトの軌跡	113



## 巻頭言

持続可能な社会を担う  
児童・生徒の育成を目指して(発刊の辞)

宮城教育大学  
学長  
高橋 孝助

このたび、気仙沼市教育委員会と宮城教育大学の共同研究による『気仙沼ESD共同研究紀要 持続可能な社会を担う児童・生徒の育成を目指して』の発刊を、心からお慶び申し上げます。

振り返ってみれば、『メビウス～持続可能な循環“Mobius for Sustainability”2002～2009』が発刊されてから、すでに3年が経過しましたが、この間に日本全国における持続発展教育（ESD）とユネスコスクールの展開は、実に、大きな進展を見せました。ユネスコスクールの数が27校から279校に増加したこともその一つですが、ユネスコスクールに加盟していない学校でも、ESDに関する取り組みが増えてきています。こうした全国の動きの中で、常にその先頭になって、ESDとユネスコスクールの活動をリードしてきたのが、白幡勝美教育長をはじめとする気仙沼市教育委員会と気仙沼市の学校であったことは、今さら述べるまでもありません。

今回の『気仙沼ESD共同研究紀要 持続可能な社会を担う児童・生徒の育成を目指して』が目指したのは、ESDやユネスコスクール活動による教育的成果についての実証的な研究です。特に中井小学校の及川幸彦教頭先生を中心にまとめられた本書の統計やデータは、ESDによって養われる資質や能力についての実証的データとして、他地域に多大な貢献をするものと考えられます。

また、本書に掲載されている気仙沼市の小中高等学校各校の取り組み事例は、どれ一つとして同じ取り組みはなく、それぞれの学校における実践が教員の創意工夫によって展開されています。それほど大きくはない気仙沼の市域の中でも、豊富な教育的資源を活用し、競い合うようになり、「地域に根差した教育」が進められていることが、本書からわかります。

宮城教育大学は、地域に貢献する教員養成大学として、気仙沼における教育の様々な側面を支援させていただいております。ESD/ユネスコスクールの活動もそうした、連携協力の一つです。本書は、第一に気仙沼市の教員と教育委員会による熱心な取り組みの成果であり、そしてまた、気仙沼市と大学の連携の軌跡を示しているものともいえます。

今後も気仙沼市教育委員会と大学との連携を深め、本書のタイトルのようにESDを通じて持続可能な社会を担う子どもたちが、次々と育っていくことを期待いたしております。

気仙沼ESD共同研究紀要の  
発刊にあたって

気仙沼市教育委員会  
教育長  
白幡 勝美

平成22年度「気仙沼ESD共同研究紀要」の発刊にあたり、本市のESDの実践が小・中学校を中心として確かな発展を続け、内容的にも一層豊かになってきていることについて、掛け替えのない連携を頂いておりますユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASP UnivNet）、国連大学、ユネスコアジア文化センター、気仙沼ユネスコ協会を始めとする各方面の機関、地域の皆様に深く感謝致します。特に、連携の上、ご指導頂いております宮城教育大学の皆様には衷心より御礼を申し上げます。

気仙沼市の全てのユネスコスクールのESDは郷土気仙沼市、広くは世界までの未来における持続可能性を見据え、多くの課題とその解決を意識しつつ、体を鍛え、人間性を高め、学力をはじめとする知的能力を共通して磨いているのですが、気仙沼市は南北に長く且つ変化に富んだ海や山、そして市街地を持っているが故に、各学校は大きく異なる自然環境や社会環境に囲まれており、学校を中心とする連携もそれぞれに特徴あるものになっています。したがって、それを活かして実践されるESDもまた多様な内容を持つことになっています。そのような実践への指導・支援は多岐にわたるのであり、まさに大学や大学間のネットワーク等の指導に活かせる資源が大切となるわけで、宮城教育大学並びに設置2年目を迎えた気仙沼市・宮城教育大学連携センターに果たして頂いているものには、本当に大きなものになっていると述べさせていただきたいと思っております。

さて、本年度の気仙沼ESD共同研究紀要は市内の学校教育におけるESDの推進状況の分析と、各学校の実践計画及び実践して見えてきた課題を含む活動報告（実践事例）を主にしていますが、その内容は、中井小学校及川教頭を始めとする気仙沼市立学校教頭会研究部会のESDについての研究が基になっています。各学校における取り組みの深まりや地域における広がり、それを記すために割かれた頁数は必ずしも比例していないなど体裁に課題は残っていますが、この紀要は当該地域のESDが、学校としての実践やそのための方法の集積の段階から、実践の段階を把握しつつ、結果・効果を見取っていくことを一層意識する段階に入ったことを明らかに示すものとなっています。

各学校の実践を押し進められた先生方をはじめとする関係者に敬意を表するものでありますが、多くの方々のESDに係るご尽力は、過去が準備してくれた社会や誰かが用意してくれた職場を最適の活躍の場とするような生き方でなく、より広く社会に結びつき、持続性のある自然やよりよい社会的・文化的環境をつくって、その中で生きていこうとする、真に逞しい人間性や創造性に富んだ人材の育成に確かにつながっていると思っております。

本紀要が、各学校での次年度以降の実践に活用されること、そして、ESDの推進にご協力頂いております関係各方面には、今後の連携の参考として頂くことを願うものであります。